

有森信二

二万九百本。一日に三本のビールを二十年間飲んだと仮定し、電卓で弾いてみた。

昭夫にはその数字がひどく膨大なものにも思えるし、意外に小さいものだとも思える。しかし、実際に胃袋に収めた酒の量はそんなものではない筈である。

酒でサラリーマン生活を棒に振り、友人の紹介で身を置かせてもらった塾を首になり、妻子にも逃げられた。

となると、もう酒の一本一本が劇薬でしかない。

そう思いながら、今も下田でコップを傾けている。この半年余り、鳩尾のあたりが妙に重苦しく、ときには酸っぱいものが上がつて来たりする。起き抜けには腹部のあたりがひどく膨満しており、食欲もなく、軽い立ちくらみさえある。そろそろ年貢の納め時かもしれないと昭夫は思い、その不快を押さえ込むために、また飲んでいく。

昭夫にとって下田は、好みのままにとはいかないまでも、どうにか注文どおりの酒を提供してくれる唯一の店である。スナック、割烹、小料理屋などと名の付く店は、とうに昭夫には無縁のものとなった。

付けを溜め、店の子に殴りかかり、ガラスを破り、客に

コップを投げ付けるというのが毎度のことであつたから、店のドアを開けた途端に追い出されてしまう。

その点、下田は違っていた。溜めた付けを催促される訳でもなく、割ったガラスを弁償させられたこともない。その替わり、八十キロはあろうかという巨漢のお吉さんは、一人息子が三軒隣で営む酒卸店の配達夫として、昭夫がこゝとを起こす度に使った。

始めのうち、何かをしでかしたときに通つたのだつた酒卸店が、いつの間にか昭夫の勤め先になつた。

主人の寛平というお吉さんの息子も、百キロを越す巨漢で、太鼓腹に小さな前掛けをぶら下げて大汗をかき、売りの掛けの督促が不得手というところまでそっくりだつた。

「そのくらいにしときな」

お吉さんは、五杯目の酒を注ぎながら言つた。昭夫も、これ以上飲むと見境のつかない域に落ちてしまうということとを、長年の勘で知つている。昭夫が、もう一杯と言えば、お吉さんは強く拒むことはしないのだが、今夜は肝心の昭夫の方が、もう一つ調子に乗れない。

昭夫は、五杯目のコップを恐ろしく遅いピッチで口に運びながら、列車が通過する度に激しく揺れる店の隅の椅子に腰掛け、目を薄めたまま煤けた天井を見上げる。

新井の肺がよくないという話を聞いたのは、昨夜のことである。あと三か月、いや二か月は持つまい、と高校の同

窓の溝口は言った。新井の具合が悪いなどということとは、昭夫には初耳だった。新井は学生時代はサッカー部のキャプテンを務め、今は出身高校の体育の教師として、やはりサッカー部を率いて、全国大会に三度駒を進め、前回大会で念願の初優勝を果たしたという華々しい経歴をもっている。

「三箱は吸っていたからな」溝口は、ヘビースモーカーである新井の病状をそう伝えた。

「おまけに、一升は軽い口だからな」昭夫はふうっと息を吐きながら、溝口の口調を真似てそう呟いた。

あと二か月という、まだ四十二歳のままである。新井には、七人の子供がいる。

「元気のいいやつは、子供まで人の何倍も作りやがって」つい一年前、下田にたまたま立ち寄った同窓生の集まりで、新井はみんなから冷やかされ、「自分の子供だけで一チーム作るつもりだからな、お前らとは意気込みが全然違うんだよ」と笑い飛ばしていた。

確か十七になる女の子が頭で、女、女、女、女、女、男と続いて、一番下も誕生を迎えたばかりの女の子の筈だ。

「お前、女ばかりのチームを作る気かよ」

溝口たちが、分厚い新井の胸板を叩きながら、酒の肴にして何度もかかっていた。その新井は、恰好の酒の肴ではあったが、手腕を発揮し始めた体育教師としての貫禄を

見せ、柱を背にずしりと腰を据えていた。

あと二か月ということになると、一番下の子が出来た頃、新井の体は既に触まれ始めていたのだったろうか、と考える。ということとは、下田で豪快に飲んだあのときの新井の身中のどこかに、小さくはない陰が忍び込んでいた、ということになるうか。

天井を見ながら、そんなふうには思いを巡らせていると、八年前に別れた公一と京二のことが思い出されてくる。あのとき、十歳と八歳だったから、今は二人とも高校生である。しかし、自分の場合、彼らに顔を会わずことも出来ない。挫折という点では、新井と同じ、というより先輩だ。

が、自分と新井とでは決定的に違う、と酔いの澱んだ頭で考え、まだ半分以上残っているコップの酒を一息に呑もうとして噎せた。

「珍しいな、あんたが酒を零すなんて」

お吉さんはおでんの具を長箸でつついていたが、昭夫が首根っこまで真っ赤にして噎せかえるのを、面白そうに眺めている。

「変な気分だよ、今夜は」昭夫が息を整えながら言うと、「そろそろ性根を入れ替えたらかね」とそのときを待っていたかのごとく、すかさず言った。妻や子供たちを呼び返し、元の生活に戻るのが一番、というのがお吉さんの

口癖だった。しかし、昭夫は妻の京子との間には、もう埋めようのない深い溝が出来てしまっていることを知っている。その原因を作ったのは、昭夫自身である。

青ざめるほど酔って、瓶やコップの破片で自分の胸や顔を刺し、血を流している場面に、京子は何度出食わしたところか。「死にやあいんだろ、死にやあ」と振りかざした出刃包丁に京子が飛び付き、幾針も縫う怪我をさせたこともある。子供たちは、昭夫の怒声を聞く度に震え、ひきつけを起こしたという。

そんなことを、昭夫は殆ど覚えていない。酔いが覚めかけたところで、自分のしでかしたことの顛末に戦き、また酒を呷ってしまう。つまるところ、生きていくための肝心の部分が欠落しているのだ。

京子に男がいたなどというのは理由にならない。夜逃げ同然に、京子が男と逐電したというのも、その男のどこかに日向の匂いを嗅ぎ付けることが出来たからに違いない。「つい二、三日前ぐらいだったかね。電話をよこして、しきりに聞いてたよ」

「なにを」
「決まってるじゃないか、あんたのときさ。あんたが京子さんのことをまだ忘れてないかって、涙声でね。向こうの方は、きれいさっぱり別れたと言ってた」
「バカな奴だ」

「そりやあないだろう。いくらあんたがクズであつたにしても、十年も一緒に暮らしてくれたんじゃないか」

「もう、別れて八年になる」

「確かに、あたしも乗り気じゃないよ。もうすっぱり諦めちゃいな、と何度言つたかしれないさ。元の鞘に収まつたら、今度こそ本当に殺されかねないからとね」

「あり得ることだ。今度出会つたが最後、どちらかが殺しの下手人になるのが落ちだろう。そのように伝えてほしい」

お吉さんは、答えなかった。サークル仲間らしい五人連れの学生が入ってきたため、忙しくなった。「厚揚げに、こんにやくに、大根」などという若い声に、お吉さんはアイヨツと頷き、狭いカウンターの中を忙しく動き始めた。

下田の隣は公民館になっている。ずい分古い建物で、灯りが点いているところをめつたに見たことがない。そのくせ、ビルやコンビニなどがひしめきあっている街並みのはずれの一面に、かなりの面積を占めている。だから、夜はそこだけが巨大な窪地に見える。

昭夫は、下田を出て公民館の前をよるめきながら歩いて行く。それほど酔っている訳ではないのだが、体のふんばりがきかない。足も腰もたよりない。

酔うより先に、体の芯のあたりが萎えてくる。これは今

夜に限らず、この半年あまりの間ときどき感じていたことであるが、今夜は特にひどい。腹部になにかが詰まってでもいるのか、胃のあたりに冷たく乱れる脈がある。

こんな自分の体、新井にくれてやってもいいな、と人気がない公民館の庭に向かつて、小石を一つ投げた。

「あと四人、いやあと五人の子供を生ませなくちゃ」

昭夫は、新井が焦っているだろうことに可笑しくなって、暗がりの扉に寄りかかり、夜空を見上げながら小便をした。リゲル、シリウス、ペテルギウス、幼い頃に覚えた星々が、変わらぬ光を放っている。「面白い、あと五人も孕ませなきゃならねえ」昭夫は小便を逆らせながら左右に振り、声に出して笑った。

公民館の角には横断歩道があつて、そこを過ぎると踏切になつている。踏切には遮断機はなく、警報機だけがついている。幅は人二人がすれ違うのがやっとというところで、踏切にかかる数メートル手前に小さな地蔵が立っている。

いつ頃、誰が立てたものかお吉さんもよくは知らないというから、かなりの歳月を経たものらしい。その証拠に、地蔵の目鼻は識別出来なくらいに潰れている。それが、線路沿いにある夾竹桃の葉陰に隠れて、苔と蔦に全身が覆われている。

横断歩道を歩き、昭夫は夾竹桃の葉が垂れ落ちてくるのを潜って踏切に向かった。踏切を渡ると、五百メートルほ

どでアパートに着く。いつも昭夫は、この踏切まで来ると足がひどく重くなる。ただそう感じるだけなのかも知れないが、誰かに操られて足を運んでいるという気分になる。

お吉さんに言わせると、彼女が女学校に通っていた時分というから四十数年以上前のことなるうか、この踏切の近くで汽車が脱線し、三十数人が死ぬという事故があつたそう、「だから、あの踏切には、今でも成仏できない多くの魂が彷徨っているのさ」ということになる。

地蔵は、その事故のときには既に苔むしたまま立っていたというのだから、以前にもお吉さんの知らない死者が結構いたのかもしれない。

その事故以来、地蔵に花や線香を手向け、参る人が絶えないのだという。

「それからというもの、戦後のどさくさで食いつばぐれたり、商売に失敗したり、借金に追われた連中が、この踏切にバタバタ飛び込みまうんだ。お地蔵さんがこの世の恥辱を背負ってくれ、向こうの世界へと背中を押してくれるという言い伝えが始まつてね」

お吉さんはこともなきように言い、「ありがたいことに、この十年ばかりはそんな連中にお目にかからなくなつたけどさ。あたしは、いったい何回現場に立ち会つたと思う。いいもんじゃないよ、こればかりは」と、力を込め思い切りぞんざいに言う。

しだれかかっている夾竹桃の枝をくぐり抜けて踏切に入つたとき、昭夫は奇妙な胸のざわつきを感じ、線路上に目を走らせた。しかし、見通しよく伸びる線路の上には、何の変つたところもなかった。気のせいだったのかと思ひ、今夜はやつぱりどうかしているなど後ろを振り返つたときだった。

手前の夾竹桃の繁みの中に、震えて動く赤いものが見えた。その輪郭を辿つてみると、赤いスカートの女が繁みの下に蹲っているのだった。

昭夫は繁みに向かつて突進し、いきなり走り出そうとした女を抱き止めていた。

髪を乱した女の顔は青く、水銀灯の灯りに照らし出された輪郭は細かった。しかし、昭夫に組み敷かれた女の力は意外に強く、胸は荒い息づかいと、激しい鼓動に上下した。「何するのさ、いったい何なのよ」

女の赤いスカートはめくれ、白い素足が闇の中で伸びたり縮んだりした。昭夫は弾かれるままに女から離れ、女の顔を一メートルほどの距離から見詰めた。女は、激しい形相で昭夫を睨み返した。

「君が何をしようとしてるかわかつてる」

昭夫は自分ながら気のきかない台詞だと思ひながら、女の目を睨み返した。

女は、昭夫の視線から目を逸らさず、スカートのめくれ

を直し、セーターの乱れを直した。弾みで飛んでしまったのだからサンダルも探し当て、ゆっくりと立ち上がった。

「近くに來ないで。余計なことするんじゃないよ」

女は乱れた髪を指で掻き上げながら、はすっぱに言った。豊かな髪の下に、猫に似た目が冷たく光っている。

「止める、止めるんだ」

昭夫はすかさず女に掴みかかった。自分のどこに、そんな獐猛な力が潜んでいたのだったろう。女の首根っこを捕まえ、強引に自分の懷に抱え込んだ。「なにするんだ、この野郎」と、金切り声を浴びせる女を離さない。

そのうち、昭夫の腕に噛みついたり、服が裂けるほどに抵抗していた女が、あきらめたのか道端に膝をついて、喘ぎ出した。しかし、少しでも昭夫が手を緩めると、間髪を入れずに走り出そうとするから、昭夫も女の肩を押さえ、一緒に道端に座り込んだ。

その間に、列車が目の前を四本上下した。

「離してよ。畜生、舌を噛むわよ」

女は、ゼイゼイと荒い息を吐いた。道路に突き立てた指先から、血が滲んでいる。黒々とした髪が、肩を落ちコンクリートを掃いている。

ギクリと喉を鳴らして唾を飲み込むと、女は顔を上げた。目には涙が溢れ、零れ落ちている。

「わかった。手荒なことをして済まない。好きにしたらいい

い。本当は、俺の方が舌を噛みたいぐらいだ。なんだったら、君と一緒に、今ここで」

昭夫は、女の首にまわしていた手をゆっくりと解いた。

「ふざけんじやないよ」女は激しく首を振り、俯いたまま黙り込んでしまった。

昭夫は昨夜のことは夢だったのか、と明け方早くに目を覚まし隣を見た。まだ日が昇る前らしく、あたりは薄闇の中にあつた。部屋の底に、まぎれもない昨夜の女が昭夫に背を見せ、隣の薄い布団にくるまっていた。

女は眠っていないのか、首をもたげた昭夫の気配に、布団を頭まで引き上げた。

「約束を守ってくれたんだ」

昭夫が昨夜の切れ切れの記憶を辿りながら言つても、女は身じろぎもしない。

あれから、昭夫も気が動転してしばらく寝付けないでいたのだつたが、炬燵布団の温もりが体を暖めてくれるにつれ、妙な具合に絡まっていた神経の方も少しほぐれてきて、知らぬ間に寝入っていたのだつた。

鍵は掛けていなかったし、掛けたとしても開けようと思えば、簡単に開けられる。だから、女は昭夫の手を離れてまた踏切に向かうことも容易に出来た筈である。

「朝まで待つてろ。今日のところはともかく、朝まで待つてくれ」女を六畳の部屋に座らせ、昭夫は何度もそう言ったことを覚えている。朝まで待つて何をどうしようということもなかったが、ともかく女の気持を鎮めようと思ったのだつた。

確かに昭夫は酔っていた。お吉さんの言葉に京子のことが出て、自分の様子を聞いてきたというあたりで、いたたまれなくなつた。公一と京子のこととも思い出され、やり場のない気持になりかけていた。

入ってきたサークルの学生たちのように、昭夫も京子も、あんなふうは無邪気におでんをつついたりしていたときもあつたのだ、と胸の底を生温かく過ぎるものがあつた。

昭夫も京子も大学の授業には出ず、二人の属する会派の部屋に朝から晩まで入り浸り、先頭に立つて街頭に出た。今自分たちは、公害を告発しているのだという自負があつた。自分たちこそが、フロンティアだという自惚れがあつた。現地に出掛け、患者と話し合い、加害企業と渡り合つた。当然のごとく、至る所で警察と対峙した。

「被害者を被害者たらしめているのは、企業だけでもない。官憲だけでもない。現政権だけでもない。のうのうと知らぬ顔をして生きている、我々の無知がなせるものだ」

昭夫が、現地闘争の総括の場で、ハンドマイクを握りそう発言したとき、集結した仲間から「何を間抜けなこと言いやがる」、「屁理屈垂れるんじやねえ」、「どこかの回

し者じゃねえか」、「即刻摘み出せ」という怒号が湧き起こり、瞬く間にシャツを引き裂かれ、全身を小突かれ、輪の外に弾き出されてしまった。昭夫と共に行動していた京子も、一緒に会場の外の雨の中に放り出されていた。

昭夫と京子は、濡れて汚れた衣服のまま電車に乗り、大学の会派の部屋に逃げ帰ったのだが、大学にも長くいることが出来なかった。通い慣れた京子のアパートに駆け込んだ昭夫は、結局十年も居座ることになった。

もともと飲める口であったのが、朝となく昼となく酒びたりになり、単位の取得もないまま大学を中退した。

首尾よく、中堅の食品会社に職を得たものの、顧客との商談に酒臭い息を吐きながら臨むことは出来ないことであり、半年後には辞表を書かされた。次に、友人の紹介で就いた塾の講師は、昭夫が身を立て直すには恰好の職種であり、生徒の信頼も得ていたのであるが、酒なしには教壇に立つことが出来なかった。案の定、一年後の契約更新はなしと言ひ渡されたのだった。

京子は公一と京二を抱えながら、二人を保育所に預け、雑誌社の編集担当としての活路を見出し、街の文化人らとの交流を重ねる中で、自分の名前を付したコラムをまかされるまでになった。

昭夫は、昼間から一人で酒場を彷徨い、汚泥に嵌まり込み、体のどこかに生傷の絶えない日はなかった。アパート

に戻っても刃物を振り回し、京子にも切り付け、一一〇番の世話になったことが二度や三度ではない。

京子の方がアパートに戻らなくなり、編集の仕事で知り合った絵描きのマンシヨンに暮らし始めた。昭夫は、マンシヨンの周辺に京子を待ち伏せし、飲み代を無心することと引き換えに、男と京子の仲を見過ごすことにしてきたのだった。

「今更、京子が本気で縊りを戻そうなどとする筈がない。哀れまれる俺にだって、意地がある」

昭夫は、昨夜の鬱屈とした気分を振り払いがてら、布団の女を見た。

築四十年以上という安普請の六畳一間に台所である。隙間風がドアや汚れたガラスを震わせ、吹き抜けていく。持ち物といえは、敷きっぱなしの薄い布団と、卓袱台替わりの炬燵しかない。

女は布団にすっぽりくるまってはいるが、長い髪の一部をはみ出させている。黒くて艶やかなそれが、射し始めた朝陽に照らされ、小刻みに震えているのがわかる。

「泣きたきゃあ、泣くがいいさ」

昭夫は鼻の奥まで込み上げてきたクシヤミをこらえながら、言った。女は答えない。昭夫に背を向け、海老のかたち丸まっている。

寒い。炬燵からほんの少し肩を出しただけで、今朝の冷え込みのほどが窺える。昭夫は脱ぎ捨てていたジャンパーを引き寄せ、あわてて羽織った。

女の体を包む布団は薄物であるから、女は泣いているのではなく、寒さに肩を震わせているのかも知れない。

昭夫は昨夜酔っていたせいもあるが、女の顔をぼんやりとしか思い出せなかった。

クシヤミを立て続けに三つした後、昭夫は女の布団に手を伸ばし、顔のあたりだけでも覗こうとした。指先が女の髪に微かに触れた途端、「触るんじゃない」という激しい声が昭夫の鼻面を打った。

「それ以上近付いたら、舌を噛むから」

女の声は胸間声に近く、獣の唸りにも似ていた。しかし、髪の毛の部分だけ露わになった布団は、それ以上引き上げられることはなかった。女は、歯をギリギリ噛み、顔を布団に打ち付けていた。まるで腹の底から込み上げてきた吐き気にも似た呻き声が、食いしばった歯の間から洩れてくるのだと知れた。

「なんで余計なことするんだ」

「馬鹿にするんじゃないよ」

「畜生、邪魔しやがって」

女は後ろ向きのまま、およそ考えられ得る限りの罵詈雑言を発した。

昭夫は、「俺も同じだ。君に同情など、これっぽっちもしちゃいない。昨夜は、なぜか、あせすずにはいられなかったというだけだ。悪く思わないでくれ」と言い、ベッドボトルの茶を開け、女にもコップに注いで「喉が渴いてたら飲みな。温くはないけど」と、炬燵の上に置き、残りをラッパ飲みにした。

女の呻きがだんだん収まり、大きな呼吸に変わった。それでも、振り返ろうとはしなかった。勝手にしろ、と昭夫はトイレに行くために廊下に出た。廊下には、白い砂粒が零れざらついていた。昨夜、廊下を引きずり、ドアを開け、喚き抗う女を力まかせに放り込んだのだった。

部屋に戻ると、炬燵の上のコップが空になっていた。しかし女は、布団から少しだけ髪を覗かせた以前の恰好のまま、背中を向けていた。

「引き留めてしまったな。もう、どこへなりと行けばいい帰るとこ、あるんだろ」

昭夫はジャンパーに袖を通し、「働きに出掛けなきゃならない」と、出鱈目を言ってみた。いつもだと、昭夫は昼前によくやく起き出し、寛平の店に足を運んだ。一働きすると店の隣のスーパで握り飯を仕入れ、店の隅で昼飯とも夕飯ともつかない一食だけの飯を食った。閉店までの残りの三時間あまりの元気をつけるためだった。

店が終わり、日当をもらうと、そのまま下田へ直行する

のがこの十数年の習いだった。

昭夫は、いかにも支度に忙しいんだといわんばかりに、壁から吊している作業ズボンに着替え、ジャンパーを脱いで昨夜の砂埃を派手な音をたて、はたいした。

「鍵は掛かってねえから、好きなようにしな」

普段は持ち歩かないシヨルダーバッグを背負い、ドアノブを開けようとした。

「帰るとこ、ない」

布団の中から、女が声をあげた。今の今まで、喚き散らしていた女の声とは違う弱々しいものだった。

女は顔の半分を隠してしまふほど多すぎる髪を掻き上げ、指で乱暴に梳いた。道路に突き立てていた右手の人差し指の爪は割れ、血が固まりこびりついていた。

髪の間に見れた女の顔は、まだ二十歳には届かないのではないかというほど幼いものがあつた。これまで、化粧をしたこともないのかもしれない。頬のあたりの産毛が射し込んでくる朝日の光に透き、浮いて見えた。

「お前、学生なのか」

「違う、と首を振った」

「働いているのか」

これも違う、と言つた。女は、振れていたピンクのセーターと赤いスカートの乱れを直し、背筋を伸ばして座つた。

布団は丁寧に畳んで傍の押入を見付けしまひ込んだ。

「俺は出掛けなくちやならん」

女は、表情もなく頷いた。

昭夫は、寛平の店が開くのが待ち遠しかった。

街には人通りがなかった。時計屋を覗き込むと、七時前二十分だった。

あちこちの家で、雨戸の開く音がしたり、パジャマ姿のまままで牛乳瓶と朝刊を玄関先に取りに出る姿があつた。

寛平の店には昼過ぎにならないと入つたことがなかつたし、第一何時に開店するのも知らなかつた。店の前まで行つたが、シャッターが下り、生ゴミが一袋入口のあたりに出されたままだった。

店の前を通り抜け、公園に辿り着いた。公園といつても、ビルとビルの谷間に小さく設けられた避難所並に狭い場所で、遊動円木とブランコとベンチが二脚並べられただけの場所である。

昭夫はベンチの隅に腰を下ろすと、女のことを考えた。

というより、アパートからの道々ずつと考えていたといつてよい。いったい、あの女は何者だ。何で踏切に入り込むうとしていたんだ。それより、自分が何であんな女と出食わしたんだ。

子供たちがランドセルを背負い公園を横切つても、駅に

急ぐ男たちが目の前を突っ切っても、蹲ったままだった。

あたりに人影がなくなった頃、昭夫はゆるりと立ち上がり、寛平の店に向かった。

「おっさんじゃないか。何を勘違いした、こんな早くに。

店は今から開けるところさ。奇妙なこともあるもんだ。昼から嵐にでもなりやあせんか」

寛平はシャッターを上げかけたところだった。お決まりの野球帽も、商店名の入ったジャンパーも、身に付けていなかった。髭も剃ってはず、首には汚れたタオルを巻いていた。

「朝飯、食ってねえだろ。よかつたら上がらんか。俺もこれからだ。朝の内に、店の風通しだけはしとかんとな」

寛平は陽気だった。寛平は店の裏手の一軒家に一人で住んでいる。嫁さんに逃げられて十年になるというから、年齢は昭夫より少ないものの、一人暮らし歴は先輩になる。台所の上がると、味噌汁にスクランブルエッグに大根おろしまでこしらえている。

「ほう、寛平さんの作」

昭夫が感心していると、「簡単なことよ。ロールキャベツだって、茶碗蒸しだってお手のもんだ」と得意気だ。いつも配送のことでガミガミ指図する寛平に、こんな特技があるうとは思わなかった。

「美味いな」

長い間、酒の酔いが残っているため朝飯を食うという気も起こらず、金もなかった昭夫だったが、差し出された飯を二杯もたいらげた。いつも差し込んでくる腹部の不快感も、さほど感じなかった。

「カロリーを絞ってるのよ。なにしろ、一人になると、自分のことは自分で管理せんと、誰も当てに出来ねえからな。こいつはチャンスだぞと、ものは考えようだよ」

寛平は、いつ見ても百キロは下らないと見える腹を波打たせて笑った。

昭夫は、九時の開店から初めて仕事に就いた。

酒の卸店だから、朝の内にはたいした仕事はないだろうと思っていたが、掃除、在庫の点検、伝票の集計、購入品目の積み卸し確認、配送計画の作成など、かなりの作業が必要だった。昭夫は、近場の店への配送作業だけを行っていたが、これにはかなり綿密に割り振られた計画があることを初めて知った。

寛平は体つきの割には細めに動く性分だった。腰掛けると悲鳴をあげそうな椅子に腰を下ろし、ボールペンで頭を叩きながら、これらの作業を殆ど一人でこなしている。ただ、二日に一度ぐらいの間隔で、近所の湊さんという主婦が事務のパートに来ていたから、都合実質二人分の労力で店をやっているのだった。

「嫁のやつだけどね、多分、金が目当てに来てたんだろうよ。金庫の有り金から、通帳から全部持ち逃げしやがった。赤ん坊も連れてね。とんだ食わせ者だったよ。ともかく、出て行つてくれてセイセイしたことは確かだね」

お吉さんが、以前寛平も嫁に逃げられたという話をしたときのことを思い出した。

「そりゃあ、寛平には不釣り合いな別嬪だったよ。生むが生むまでよう働かし、生んだ後も十日で店に出た。今考えると、やっぱり無理があつたね、この組み合わせは」

お吉さんは、煙草の煙の輪をプツと吐き、「寛平には、その金はくれてやれと言つたよ。なにしろ丸三年、うちの嫁として一応のことをしてくれたんだ」と、しみじみ話してくれたことがあつた。

昭夫の頭に、残してきた女のことが浮かんだが、一日仕事をしていたら、勝手にどこかに行くだらうと考えた。

しかし、考えまいとすればするほど、いつの間にか女の横顔が浮かんできたり、長い髪の下に隠された表情が、ひとりでに思い出された。その度に、通りすがりにたまたま出食わしただけでしかない、縁もゆかりもない女のことを思っている自分が可笑しくなつた。

「偶然踏切を通りかかつたとき、向こうも踏切にさしかかつただけで、なんの接点もない。アパートに連れて来たの

も、一人にしてはおけないあの場の状態からだ。決して、いらぬ情をかけてやつたりなどしちやいない」

一人で反芻し、浮かび上がつて来た思いをすぐに流した。寛平の指示どおりに、配達を終えた。いつもだと昼過ぎから仕事にかかるので、終わった頃にはあたりはとつぷり暮れてくるのだが、朝一番から店に入ったこともあり、まだ明るいうちに回り終えてしまつた。

普段はそのまま下田に直行するのだが、自然とスーパの方に向いた。今更調理などする気はないので、いつもより少しだけ奮発した内容の弁当を二つと、缶ビール、酒のバック、麦茶などを買ひ、下田の方に歩き出した。

しかし、足は一つ手前の路地を折れ、アパートへの道の方に向いていた。公園の時計を見ると、五時をいくらか過ぎたばかりだった。こんな時間にアパートに戻るの、ここに住んで初めてである。それも、スーパの袋を下げ、いくらか急ぎ足になっている。

「こいつをアパートに放り込んで、すぐその足で下田に出掛けよう」

頭の中で、そう段取りをつけた。女がいる筈もないし、荷物が邪魔で、まだ明る過ぎるからいったんアパートに寄るだけのことではない。

電柱の立っている角を曲がれば、アパートだ。アパートは路地一本奥に入っているから、表通りからは見えない。

不燃物ゴミが積み上げられたままになっている置き場を抜け、細い裏道を鉤型に歩けば、二階建ての木造アパートが見える。北玄閨を入ってすぐが昭夫の部屋だ。

窓の外から見ても、女のいる気配はない。

「当たり前だ。何考えてやがる」

昭夫はスーパールの袋を路地裏の看板にぶつけた拍子に、自分の頭にぼんやり浮かべていたことを笑い飛ばした。鉤型の細道を曲がると、北玄閨だ。

北玄閨を開ける。いつもの薄暗く汚れた廊下に、昨夜の砂粒が零れたままだった。誰かが踏み付けたとみえて、スリッパの底の型が複数乱れていた。靴を脱ぎ捨てると、部屋のドアを引いた。引きつ放しの炬燵布団の朱が目に入った。いつもと変わりのない自分の部屋だ。

昭夫は、スーパールの袋を狭い流し台の上に放ると、六畳の部屋に入った。

部屋の隅に女が座っている。肩をすぼめ、俯いているので顔は見えない。黒く長い髪が腰のあたりまで垂れている。「出て行つてないのか」

女は答えず、顔を上げようとしめない。生地の薄いセーターと、赤いスカートのままだ。肩口を小さく震わせているのは、寒さのせいであるのかもしれない。

昭夫は押入を開け、奥の方にある筈の箱を探った。確か、京子が絵描きの元に走る前、丁寧に洗濯してしまひ込んで

いた季節毎の衣類箱をいくつか残していた。昭夫は処分するのも億劫で、そのまま手を付けずにいたのだった。

指に三つのプラスチックの箱が触れた。昭夫が放り込んだ綿のはみ出た布団や、汚れたシャツなどに隠れてそれはあつた。

「自由に使えばいい。一揃いは入ってるだろう」

女はようやく顔を上げ、色白の端正な顔立ちを昭夫に向けた。しかし、その目は激しい憎悪を剥き出しにして昭夫を睨み付けている。女は、昭夫が今の位置から一步でも近付いたら、たちどころに舌を噛み切つてやる、と言わんばかりの形相で体を強ばらせているのだった。

が、やがて、その端正な顔がくしゃくしゃに崩れ、嗚咽が洩れ出した。

「なんで邪魔したんだ。もう、ダメだ。いったい、どうしてくれる」

女は身を振つた。爪で、畳をバリバリと搔いた。長い髪を毛をふり乱し、引き千切つた。

「どうかしたのかい。今日はえらく進まないじゃないか」

お吉さんが、昭夫の斜め前に立っている。

「返事もしないし、まだコップ一杯だけだよ。いつもの三分の一にもならないねえ。なあに、こつちは構やしないんだよ。あんたに飲ませたからって、それで得するわけじゃ

ないもんね。しかし、ずっと下ばかり向いて溜息などついたりして、京子さんのことでも考えてるのかい」

昭夫は、目の前のコップを取ると、一気に二杯目を飲み干し、カタリとコップをカウンターに下ろした。

「京子のこと、放つといってくれ。酒がまづくなつちまう」

「ほう、もういらぬのかい。珍しいねえ。狐にでも取り付かれてしまったのかねえ。この頃、そういうのが流行ってるらしいからねえ」

「冗談じゃねえよ。化かされてなんかたまるもんか。関係なんぞないよ、全く」

昭夫は殆ど素面のまま、椅子を立った。お吉さんの声は、それ以上追いかけて来なかった。

踏切近くまで来ると、夾竹桃の葉の陰を覗き込んだ。ひよつとして、女が潜んでいやしなしかと目を凝らして見た。誰のいる気配もないことを確かめ、ホツとしている自分にふいに腹立たしくなった。

警報が鳴り始め、上りと下りが交叉するのを待つて、足早に踏切を渡った。

その足で真つ直ぐに歩けば、アパートに辿り着く。五分とかからない。こんな早い時間に踏切を渡ったことは、ないといつてよい。公一が生まれたときも、京二が高熱を出したと連絡があつたときも、日付が変わろうとする時刻になつてしまつたのだつた。

路地を曲がり、電柱をやりすこし、アパートの見えるところまで来た。北端の部屋は暗いままだ。まだたつぷりと日が残っているけれど、もう灯りを点け始めているところもある。やれやれだ、と昭夫は自分の妄想が過ぎたのだつたと鼻白んだ。女がいる訳がない。なにしろ、畳に爪をたて、髪の毛をふり乱していた。舌を噛み切つてやる、と凄いい形相だつた。

ふと、昭夫の心に、女が舌を噛み、虫の息で転がつていゝるのではないかという疑念が湧いた。女は、唇の端からおびただしい血を流し、畳の表に血が流れ、まだ乾ききつていないそれは、女の口元や首や胸元を生臭く光らせている。指は畳表を筆り、割れた爪先からも黒い血が流れ出ている。昭夫の思いがそこに至ると、女は今もう最後の痙攣を引き起こしているのかもしれない、という光景が現実のものとして見えて来たのだつた。

そう思うと、かえつて昭夫は立ち竦んだ。もしそうだとしたら、一刻の猶予も出来ない。急に動悸が激しく鳴り出した。

「いつたい、何なんだよ、この俺は」

昭夫の胸を締め付けるのは、若い女の睨め上げてくる目の鋭い光だつた。一度も女の顔をまともに見てはいないのに、憎悪以外の何ものでもない感情がその体中から迸り出していた。

急ぐ気持から逃れ出ようと気を紛らわせるため、昭夫は置き場に出された不燃物ゴミの袋の数を数えてみたりした。まだ電気を灯さない電柱を、二度、三度と蹴り付けた。

ドアのノブを引いた。簡単に開いた。三和土に、女のサングダルがあった。

「まだいたのか」

女は、先刻と変わらない姿勢のまま畳に突っ伏していた。長い髪が畳まで垂れ、下を向いたままで荒い息を吐いている。勧めていた京子の衣類には、目もくれていない。

そのとき、一杯しか飲んでいない酒の酔いが、急激に回って来るのに似た酩酊感に襲われた。と、殆ど同時だった。女が、昭夫に向かい躍りかかって来た。髪が波打ち、光るものが昭夫の首筋を掠めた。鉢だった。鉢を逆手に持ち、切っ先を昭夫の喉元目がけて振り下ろして来た。

もんどりうって後ろ向きに倒れなかったら、一撃で刺し貫かれていたのかもしれない。畳に深く食い込んだ切っ先をすばやく引き抜くと、女は昭夫に馬乗りになり、さらに大きく振りかざしてきた。

昭夫は女の腕を掴むと、振り上げ、鉢を掴んだ手を全力で押し返し、体勢を入れ替えながら指の一本、一本を力づくで鉢から剥がしていった。女の手から鉢がようよう剥がれたときには、昭夫が女の腹にまたがり、平手で二発ほど頬を張っていた。

もみ合っている間に、女のシャツが大きくめくれ、左の乳房が露わになっていた。その乳房が荒い息遣いの度に揺れ、腹も大きく膨らんだり縮んだりした。

「フン」

女は、唾を吐いた。挑発と蔑みの色の籠もった目で、睨め上げてきた。知らぬ間にペニスが痛いほどに勃起していた。女の絡みつくほどに見開いた目を、目で突き返し、乳房を鷲掴みにし、めくれ上がった腹のあたりを眺め回した。

「大声をあげるから」

「好きにすればいい」

昭夫は荒々しく女の上半身にのしかかり、同時に下半身に手を伸ばした。

「舌を噛んでやる」

「噛んでみろ」

女は昭夫の動きに逆らうことなく、胸をはだけたまま、少しずつ足を開いていった。

昭夫が与えた京子のものを着て、女は膝をたて蹲っている。京子の洋服の丈が大きいらしく、袖や足先がだぶついているが、寒さに悴んでいた夕方までの女の青白かった肌とうっすら血の気がさして来た。

「なんで出て行かなかった」

「なんで鉢で切り付けようとした」

女は無言のままである。何度同じことを聞いても、言葉は返つて来ない。弁当とペッドボトルを与えると、よほど腹が減っていたのか、瞬く間に食い尽くしてしまった。

昭夫が自分のものも与えると、半分だけ残し、あつという間に腹に収め、ペッドボトルの茶を唇の端から零れさせながら一息に飲み、やつと人心地がついたらしかった。

昭夫は缶ビールの一本を女にも勧めてみたが、これには手を伸ばしてこなかった。結局、弁当の残り半分を肴に、一人でビールを飲むことになった。

「今朝まではものを言つてたじゃないか。黙りを決め込んでも構やしないが、最低のことには答えてくれなきゃ、何も始まらない。つまり、君の名前も分からんし、帰るところがないと言つてたが、どうしたいのかぐらいは言わないと始まらないだろう」

女は壁の染みでも数えているのか、何を聞いても横を向いたままでいたが、時計が九時に近くなつた頃、「風呂に入りたい」とぼつりと言つた。

「そんなことだったら、簡単だ。俺もちょうど行きたいと思つていた」

京子が使つていた洗面器に、石鹼やシャンプーを入れて与え、昭夫は自分の洗面器を抱え、サンダルを履いて出た。女もついてくる。銭湯は五分とはかからないところにある。「おや、早いね。どうしたんだい今日は」

番台のおかみが、声をかけてきたが、どうやら連れがあららしいと察したらしく、ああと頷いただけだった。

さあ、と湯船に浸つて昭夫は天井を見上げた。どうしてこんなことになつたのだ、と昨夜からのことを順を追つて考えてみた。しかし、何でこんな具合になつたのか、昨日まで予想だにしないことだった。

「どういうことになつちまうんだか」

昭夫は考えても詮無いことだと、上がり湯を一杯被り、風呂を出た。暖簾を潜つて外に出てみたが、女はまだ上がつていないようだった。煙草に火を点け、待つた。

一本吸い終わつたところで、女は出て来た。ぼつと顔が赤く見えるのは、湯の温もりのせいなのだろうか。戸の開け閉めも、来るときとは見違えるほどにしなやかで、手つきや足の運びまで違つて見えた。

「温もったかい」

女は答えなかつたが、少しだけコクリとした。

昭夫はズンズン歩き、アパートに戻ると、もう一本の缶ビールを開けた。一口、二口飲んで炬燵の上に缶を置いた途端、さつと女の手が缶に伸びて来た。

「この野郎」

缶を奪い返した。女の目に、儼然とした表情が過ぎつた。「欲しいんだつたら、ちゃんと言え。それより、名前ぐらいうて罰は当たらんぞ。俺も破れかぶれで暮らしてい

る。お前の邪魔なんぞ、する気は毛頭ないんだ。ただな、昨夜は、全く虫の居所が良くなかった。それだけのことだ」

女は缶ビールを一気に音をたてて飲んだ。そして、底にまだ残りがあるというふうには缶を振り、返してきた。

「いいよ。飲みたかったら飲めよ」

「あたし、中村由加、二十三。帰るところがない」

女は名前と年齢を口にしたが、昭夫は出鱈目であるのかもしれないと思いつながら、「二十三かい、まだ子供じゃないか。俺の子供もそろそろ二十間近だ。これじゃ、まるで親子の差だ」

由加がポツリポツリ話したことを繋ぎ合わせると、次のようだった。

商業高校を出、地元の農協支所に入り、主に貯金の仕事をしてきた。窓口では結構人気者だった。近辺の二、三人の男と懇ろになったが、世帯を持つには至らなかつた。

一年前、好みの男と出会った。男は洒落た車で乗り付け、由加を誘った。休みの日には鹿児島や、別府や、阿蘇に出掛けた。男の車はスポーツカーで、百五十キロ近いスピードを易々と出し、次々に他の車を抜き去った。由加は、男の全てに惚れ込んだ。

由加は、男と逢う度に、五十万円、百万円という金を渡

した。二重帳簿を作り、帳尻を合わせた。支店で貯金を担当しているのは由加一人と言つてもよかつたから、上手く誤魔化すことが出来た。この一年足らずの間に、男に渡した金は五千万円を超えた。由加自身、正確にはいくらになるのか挿んでいない。

男が恐喝容疑で逮捕され、背景に暴力組織があることや、取り調べの過程で農協支所の不明金が明るみに出て来た。

由加がホテルを泊まり歩き始めて、二か月が過ぎた。身辺に追求の手が伸び、持ち金も使い果たし、頼るところもなく、どうにも逃げ切れないと覚悟し、線路に身を投げようとした。

これだけのことを言うのに、三日近くを要したのだったが、その間、由加は部屋の掃除をし、台所に立った。

最初振りかざしてきた鋏には目をくれようとしなくて、早々に以前京子が使っていた裁縫箱にしまい込んだ。

由加は押入から京子の古着類を取り出すと、敷き放しの薄い布団と炬燵布団とを繋ぎ合わせ、二人が横になれるだけの空間を作った。できるだけ隙間を空けようとしたのだが、六畳一間でしかないのですそれは諦め、ともかくも二人が眠れる場所を確保した。

ただ、買い物には出ようとせず、昭夫が仕事から帰るついでにスーパーに寄るのが日課になった。

由加が自死を諦めたのかというところではなく、台所に

立ちながらあらぬところをぼんやり見詰めていたり、眠りにつく前に背中を震わせ、いつまでも嗚咽を漏らしていたりした。

お吉さんには寛平から早々に事情が知れ、ぶらりと下田を覗いたとき、「若い子だそうじゃないか。いいんだよ、うちの方は御無沙汰で。多分訳ありな子なんだろうから、あんたにはびつたしだ」と、なにがびつたしなのかも問わずに、一杯注いでくれた。一杯きりで下田を出るのにもだんだん慣れ、由加の待つアパートに遅くならないうちに帰り着くのだった。

話らしい話はせず、由加と二人で缶ビールを飲んだ。そうしているとき、酔って見境をなくして店という店から追いつめられたことも、会社を首になつたことも忘れてしまうことが出来た。京子が男と逃げたことも、再び京子が戻りたいと言いつたことも、もはや過ぎ去つてしまったことであり、それらは崩れた砂山のはるか向こうで揺れる陽炎だつたと思えるのである。

由加も何かに耐えており、口には出さないものの突然全身を強ばらせ、わななかせ、決まってバンジージャンプでもしたのかという勢いで闇の中に沈み込んだ。

「明日死ぬんだから」

そんなときに決まつて言う由加の口癖が、十日を数え、

二十日を数えた。

「止めやしないさ」

「絶対、明日死んでやる」

由加は目を閉じたまま、ギリギリと歯を鳴らした。

昭夫は出掛けるとき、いつでも由加の好きに出来るよう、鍵は炬燵の上に放つておいた。由加が鍵をかけ、姿をくりましたとしても、自分だけなら廊下の隅にでも寝ることが出来るし、また下田に戻つて、カウンターで眠ることも出来る。

鍵を開け放つたままで失う物など何一つ未練のものはない、本当に由加の姿が消えたとしても、探し歩くことも、取り乱すこともないと思つた。

朝は決まつた時間に出た。由加を連れて来た翌朝、行き掛かり上七時前に部屋を出たのだったが、以降も七時には出掛けることにした。

朝には、台所に立つ由加の姿があつた。

炬燵には、熱い飯と味噌汁が並べられ、梅干しまで添えられていた。米や野菜はどう調達したのかしらないが、長い髪を後ろで括り、茶まで差し出した。

ことばを挟もうとしたが、由加が俯き加減に顔を背けているので、ガツガツと食つて茶を飲み、支度もそこそこに

出掛けた後で、射し込んでくる朝の光に照らし出された

由加の顔は、まだ十分幼く、小ぶりの輪郭が胸に迫ってくるほどに青白かったのを思い返したりした。

九時までの時間を作るのが一苦勞だった。朝の時間帯は誰もが気忙しく動いていたし、空気や地面も冷え切っていて、公園のベンチで過ごすのは気鬱だった。

これまで酔った勢いでしか歩いたことのない通りを、勘を頼りに歩いてみた。自転車屋があり、銀行があり、寿司屋があり、飲み屋があり、小学校があり、病院があった。消防署があり、警察があり、表に漫画を並べた本屋があり、中古車展示場があった。

かなりの道程を来て、ふと新井が入院しているという病院はこの近くではなかったかと思ひ出し、浜の方角に二十分ほど歩いてみると、確かにそれに違いない総合病院の建物が目に入った。

新井は、後二、三か月と言われているから、一か月が経った。医師の言葉どおりだとしたら、後一か月余りということになる。

見舞つてみようかと考えたが、花形のフォワードとして鳴らし、今は母校の生徒たちを全国大会で優勝させるといふ華やかな道を歩いている新井と、飲んだくれて会社を首になり、女房に逃げられた昭夫とは立場が違い過ぎる。地の底を這いずり回っているに等しい昭夫が、新井を見舞

うとすれば、新井のプライドを傷付けてしまうことにもなりかねないと考える。

新井は、サッカーチームを作れるだけの子供をもうけると言った。女の子が六人、男の子が一人だから、後どうしても四人は足りない。

昭夫は病院前の信号でターンし、ゆっくりと寛平の店に向かう。道々で出勤途中らしいOLや、女子学生風の子に出会うのであるが、由加の容姿を超える女には殆ど出食わさないと行ってよかった。

九時前に店に入る。

寛平もそこは心得ているのか、昭夫が入る前には店を開けている。

「気色悪いな。下田でもあまり油売らんようになったちゅう。その分の給料の相殺、少し考えんといかんな」
「とは言ったが、それ以上には突つ込まなかった。」

「あんたがこんなに早く来てくれると、大助かりや。本当にありがたい助っ人や」

最近、街並整備計画の話が具体化していて、この下町の区画整理や景観整備の打ち合わせのため、頻繁に会合もたれ、まだ若手の寛平には大きな仕事が割り振られているとのことだった。

「親父の代からなんで、築五十年になるしな。俺は凶面を

引き直すなんてことには反対なんやが、お上の計画には逆らえんもんでな」

どうやら、一時的な立ち退きも含めて、この街区の再開発が喫緊の問題であるらしい。太平洋戦争末期の爆撃にも遭わなかったというこの地区は、メイン道路も狭く曲がりくねっていて、路地に至っては迷路の様相を呈していた。

「今の方が温みがあると慣れた俺らは思うんやが、購買客を都心に取られてしまうと、うちらみたいな小さな酒屋や煙草屋は、確かに世間から取り残されてしまう。売り上げは、ジリ貧でな。と言って、この街並が少々変わったからって、どうなるもんだか」

寛平はますます横に広がってきた体で、積み上げた荷物の間を窮屈そうに縫って歩く。

「配達先は今日は少ないので、午前中は在庫の確認をしよう。これも、俺一人では手が回らず苦労しよった。隅のやつから、品名と数量を読み上げてくれ」

昭夫は新たな仕事をだいぶ覚えてきた。

合間には注文を受け、配達に出る。配達先での空き瓶の回収や、売り上げ帳簿の整理にも慣れてきた。

バイクで近在の会社や、公共機関にも出向くことになった。配達先では、会社の子や役所の子と軽い挨拶も交わした。会社にはかなり可愛い子もいたが、由加ほどに色が白く、しなやかな肢体をもつ子はそうはいないと見た。

由加との比較を、いつでもどこでも知らずにしていた。

お吉さんは、決まった時間に下田に立ち寄る昭夫に、「すっかりサラリーマンに戻ったじゃないか。やれば、出来るという訳だ。甲斐甲斐しいねえ、野菜や豆腐の買い出しまでちゃんとしてさ。これが出来るんだったら、なにも別れることあなかつたんだよ」と豪快に笑いながら、コップ一杯と決まった酒を注いでくれる。

昭夫も、なぜこういうスタイルになったんだろうと、自分ながら信じられない。由加の心のことまでは知らないが、とにかく自分を待っていてくれるだろう筈の由加の姿が目につかび上がってくる。

一方で、由加はもうアパートにはいないかもしれないという思いが湧き上がる。「明日、絶対死んでやる」と昨夜も言ったのだった。いつアパートを抜け出したとしても不思議ではないし、今の時間だったら踏切のあたりはもう薄暗くなっている。

そう考えると、急に不安が吹き出してくる。一時の猶予もならない、という思いに駆られて居ても立ってもいられなくなる。

「やけに落ち着かないね」

お吉さんが揶揄気味に言う。

「本当に、酒を受け付けなくなっちゃったよ」

「そりゃあ、とんでもない。たいへんなことになっちまった。大丈夫かね」

さらに豪快なお吉さんの笑い声に送られ、下田を出る。すぐに、夾竹桃の葉陰を目指した。誰の気配もないことを確かめると、安心する。本当に高鳴っていた心臓のあたりを手をかざし、ゆっくり揉みほぐすと線路を渡る。

アパートの見えるところに来ると、灯りが点いているのを確かめ、ようやく気持が平らになる。

ただ、部屋に向かう前に、あたりの様子をそれとなく窺う。由加は、五千万円もの金を農協から奪っている。警察の手が回っていてもおかしくはないし、金を買った男が身を置く暴力組織の方で、既に嗅ぎ付けていてもおかしくはない。

ドアをそろりと開けた。長い髪を肩まで垂らした由加が、すぐに出迎えた。京子が結婚当初によく着ていた、オレンジのセーターとスカートに身を包んでいる。

「ちよつと、借りてみた」

昭夫は買ひ物の袋を三和土に投げ出すと、由加をいきなり抱き寄せた。由加は最初こそ抵抗していたが、昭夫のするがままにまかせ、豊かな髪が甘い匂いを発し始めた。

「変な物音が」

由加が突然体を硬くした。窓の外に、砂利を踏む気配が

ある。昭夫が身繕いをして立ち、カーテンをサツと開いた。何者かが路地奥に駆け込んで行った。目にするのが出来たのは、裏の建物角に消える男の黒い後ろ姿だった。

「やっぱりだわ。こうしているとイケない」

由加の顔が怯えの表情に変わっている。貢いだ男は警察に恐喝容疑で逮捕されたというが、いつ出所するかもわからず、男の仲間も五、六人は下らないだろうと言う。彼らは夜の世界で生きており、由加は数人の顔を知っているそうだ。「何をするかわからない人たちがばかりだから」と前に言っていた連中のことに違いない。

由加はセーターとスカートの乱れを直し、台所に立った。玉杓子で鍋の味を見、焼き網にししやもを並べ、大根おろしをこしらえている。顔は窓の方に向けたままで。

昭夫は冷蔵庫から缶ビールを出し、並べる。

「このアパートは、通りすがりの覗きが多いんだ。住人が若い学生ばかりだから、どうかすると黒い影が三つも、四つもこの窓の下に息を潜めて立っっていやがる。常連が何人もいるんだ」

昭夫は実際、彼らの中の二人と乱闘を演じたことがあり、殴った勢いで指を骨折した。三年ほど前のことだ。

「いつでも覚悟は出来ている。未練など何もない」

由加は、炬燵に鍋物の料理を並べながら、眉に縦皺を寄せた。スカートの上にはエプロンを着けている。

湯気の向こうに見える由加の表情は険しいのだが、その形は美しい。鼻の形、唇の形、頬の線のどこをとつても絶妙の配置で、なにより色の白さと肌の柔らかさが極め付けであると言つてよい。

男がどういふ口説き方で、由加に五千万円も貢がせたのだらうかと思ふ反面、これでは玄人の男が放つて置くわけはない、と改めて思う。

美しさというものは罪でしかない、とどこかの評論家が言つたことを耳にした記憶がある。確かに、こうやつて灯りの下で見る由加は、男の心を狂わせないではない媚薬みたいなものを隠し持つていふと言つても過言ではない。

しかし、あの夾竹桃の陰で初めて出会つたときは、黒豹そのものの獠猛な動物でしかなかつた。牙を剥き、今にも獲物に襲いかかろうと跳躍を開始する前の、猛々しい激しさだけを感じたのだつた。

強弁すれば、あのときの動物が女であるという確たる意識はなく、勿論これほどの美しさを秘めている女であるうという思ひはなかつた。昭夫にとつては、お吉さんから京子のことが持ち出された後であり、日頃から安定を欠いていた自分を余計に失つていたということもあつて、ほんの偶然に発した義侠心が招いた奇妙な出会いであつたのだ。

普段であれば、線路に身を投げようとする女を引き止めたり、渾身の力を込めて抵抗する相手を、アパートにまで

連れ帰るといふことなど考えもしないことだつた。

「邪魔、しちまつたんだつたな」

え、という顔で由加が目を瞞つた。少し頬を赤らめたところをみると、昭夫の呟きは適當ではなかつたのかもしれない。

「そもそも君をアパートに連れ帰つたといふこと。そのときは、こんな秘密を隠し持つた女だとは知らなかつた」

「うん」

「俺には失うものなど何もない。しかし、君は退路を断られたわけではない。若いんだし、美しい。男たちが群がってくるのも、無理はない。線路に飛び込もうとしたことは間違いないだらうが、きつと誰かに発見され、次のステップに進むことになつていったんだ」

「違ふ。今からだつて舌を噛み切ることが出来る。線路に走ることだつて出来る」

「焦るな、命は一つだ。だつたら、もうちよつとはましな男に出会つてからでも遅くはないぞ。五千万円はでかい。それにしても、貢いだ男のことだ。そんな奴、君の命一つくれてやるだけの玉かい。俺が言える台詞ではないが、相手に不足があり過ぎやしないか」

昭夫自身、どういふ訳でそんな台詞を思い付いたのかわからない。こんな時間に、アルコールが殆ど入つていない自分があることを、思い出そうとしても思い出せない。そ

の蒙昧が言わせた、屁理屈であっただけなのかもしれない。

昭夫は出掛けには、「戸締まりはちゃんとするように。それから、今後一週間は、どんなことがあるうと変な気を起こさないと約束してほしい」ということを言い置き、朝の街に出た。

由加は、寝起きの、まだほてりの残る顔で、怪訝な面持ちで昭夫を見送った。京子のネグリジェから部屋着に着替えをし、殆ど化粧はしないものの、これも京子の小荷物の中から口紅を出し、薄く引いた。

昭夫は新井のことを思った。後一か月と言われる新井の、無念さを持った。四十二歳。男の盛りである。高校サッカー全国大会に三度出場し、前年は念願の初制覇を果たした。今年のメンバーも前年に劣らない陣容である。それが、グラウンドから一人引き剥がされ、妻と七人の子供に囲まれ、命の炎が揺れ止もうとする病室に隔離されている。

高校サッカー全国大会の連覇を狙う、と新聞に大きく取り上げられていたのは、ほんの三か月ほど前のことだ。

われわれ同窓生には、いよいよ頑張つて、サッカーチームを作れるだけの子供をもうけると宣言していた。

そのいずれもが叶わないものとなった今、新井はこの一日、一刻をどのように過ごすのだろう。

「人間なんてわからんもんだ」と溝口は頭を捻っていた。

その溝口に会うために急いでいる。

溝口は外資系保険会社の営業部に勤務している。今でこそ中間管理職の地位にあるものの、就職したての頃は、契約が取れずに何度も新井や昭夫に泣き付いてきた。

昭夫が自己破産ともいふべき境遇に陥つても、大口の一件だけは、昭夫の名義のまま、この十年近くというものの溝口が代わりに掛け金を負担し、確保してくれている筈である。最初のうちは溝口の成績を悪化させないための方便のものであったが、溝口の出世により、最近はいよいよ負担を感じない程度になつていくと聞いていた。

その保険のことは、新井の状態が切迫しているということで、万一のときには新井の妻が七千万円を得ることになる、という話題になつたのを思い出したのだ。

「新井の現在の七年分ほどの年取相当でしかないけど、これでも当分はしのいでいけるよな。としたら、俺もいく分かは助けになれるのかもしれない」と溝口は言っていた。

「昔、新井と昭夫には正直助けてもらったよ。二人には無理矢理頼み込んで、同じ商品に加入してもらったんだ」ということを聞いたが、昭夫はまるで無関心だった。

その大口の一件のことを、昭夫は昨夜ふと思ひ出したのだ。死亡時の受取人は京子のままであったと記憶している。だとすると、このままでは具合が悪い。

このことに、なんで今まで気付かなかつたのだろうと思

い、溝口がまだ掛け金を払い込み続けてくれているのだからかという疑念が膨らみ、まんじりともせず夜明けを迎えたのだった。

途中、寛平に、若干出勤が遅れることを連絡し、保険会社の玄関で溝口が出勤してくるのを待った。受付嬢の話では、溝口課長は早く出勤する筈だとのことで、一番目のアポイントをとり、近くの公園で待つことにした。

二万千九百本。一日に三本のビールを二十年間飲んだとして、との試算を試してみたのはつい先日のことである。

このところずっと、鳩尾のあたりが重苦しく、ときには酸っぱいものが上がってくる。起き抜けには腹部のあたりが膨満し、軽い立ちくらみさえある。

由加と巡り会ったことで、腹部の方まで気が回らなかつたが、症状がとくに改善したというわけではない。一日に三本という設定も、二十年間という期間もずい分いい加減なものである。出来るだけ少ない数字を出すことで、次にやって来る筈のものから何とか逃れようという、無意識の願望が働いていたのだ。

胃部に潰瘍痕があり、かなりのポリープが見られる。要精検、との健診結果通知を受けたのは、寛平の店を手伝い出してからの従業員定期健診とやらを、義務的に受診させられたのだったから、まだ一年と経っていない。

胃部の他にも、高血圧、高脂血、コレステロール、血糖、蛋白、白血球などに異常値が示され、素人が考えただけでも七つや八つの病名が浮かんできるといったのだった。

男の四十二歳というのは、新井の場合を持ち出すまでもなく、やはり厄年に当たるのかもしれないと実感する。と言うより、厄年と言うのは、持って生まれた体の点検をし、それが何であれ、覚悟すべき節目の時期であるのではないかと思う。

昭夫の生活が不摂生に過ぎるといっているのは間違いないとして、これまではどんな暴飲暴食を繰り返しても、三十代までは土台が崩れるという危機感を持つたことがなかった。

しかし、新井の話を聞いたとき、昭夫は自分こそ社会から外れ、家庭も崩壊させたままであり、いつ何が起きようと不思議ではないと思つたのだった。

最近まで細い糸ほどのかたちで続いていた公一や京二とのやりとりも途絶えた現在、昭夫がこの場に止まるべき意味も必要もない、と言ってよかつた。

溝口は、定時より早く出勤してきたらしく、部屋で一人新聞を広げていた。

「まずいぞ」

昭夫の顔を見ると舌打ちをした。

「俺のことか」

「いや、新井だ。後半月と持つまい、と言う。今しがた、奥さんに会ってきた。朝出掛けに、急な電話をもらってね」

「それで、奴は」

「点滴の合間に、コーチを呼んで作戦を与えている。練習の進み具合をデータで確かめ、幾通りかのフォーメーションを組み立てるなど、とても病人の姿ではない。隙があれば、今にでもグラウンドに飛び出しかねない勢いだ。とは言え、葉が効いていればこそだ」

「で、奥さんは何と」

「奴の最後の願いを叶えさせてやりたい、と言うんだ。つまり、自宅に戻らせ、グラウンドにも立たせたい。チームの実際の仕上がり具合を直に見せたい。奴がグラウンドで倒れる寸前まで、好きにさせたいとな。なんとたつて、ディフェンディングチャンピオンチームの監督なんだ。新井の輝いていた誇りを、最後まで大事にしてやりたいとね」

溝口は、眼鏡をコーヒーで曇らせながら、早口に言った。
「輝いていた誇り、か」

昭夫は、自分の用件を言い出すのが場違いなことだと思えてきた。新井は死んで、誇りを残すのだ。

「奴なら、今すぐにもグラウンドの方を取るだろうな」

「医者もなかなかウンとは言ってくれないらしい。しかし、ここまでの事態に陥ったからこそその決断だ。状況が悪化する

るということは、ときに自由をもたらすこともあるのだ。勿論、制限付きの自由ではあるがな」

ユニフォームに袖を通した新井が、グラウンドに仁王立ちになり、びしびし選手に指示を送る姿が目には浮かんた。

いったん自由を得た新井は、妻と七人の子供たちの熱い眼差しを受けながら、そのままグラウンドに立ち続け、再び病院のベッドには戻らないという奇跡的な快復をも見せかねない、とさえ思われた。

「奥さん、主治医を説得するそうだ」

「上手くいくといいな」

溝口が、急ぎの用だったのか、と聞かなかつたら、そのまま会社を出ることになっていただろう。

「昔のことだが、俺の例の商品、まだ生きているのだろうか」

「ああ、新井と同じものだ。勿論だ」

「何年君に世話をかけた」

「京子さんが手を引いてからだから、八年とちよつとだな」

「面目ない。迷惑をかけたついでの相談だが」

溝口は新聞をテーブルに置いた。何ごとか、というふう

に身を乗り出した。
「これからは、掛け金の方の迷惑はかけない。これまでの分も、ゆくゆくは返済したい。実は」

受取人を京子にしたままであつては、実情にそぐわない。最近、自分の身辺の世話を親身してくれる女が出来たので、受取人名義の変更をしたい。なんとか骨を折つてくれないか。これまでの掛け金の弁済は、女への支払いの中から充てたい。と、一気に用件を切り出した。

「愛人関係か。そいつに理屈を通せと言うことだよな。しかし、京子さんだったからこそ、これまでの数々の迷惑料として残しておくのかと理解し、俺の方からの多少のプレゼントのつもりもあつて引き延ばしてきたんだが。事情が変わつたということであれば、そうもいかんと言うことだよな。京子さん、縊りを戻したいと言つてたんじゃなかったか。そのところは構わんのか。そもそも、新しい女つて、どうやってつかまえた」

昭夫は今それ以上の説明のことは勘弁してくれ、とテールに額をこすりつけんばかりに、頼み込んだ。

「新井のも、君のも妙な具合に動くことになつちまつたな。保険会社の当事者として、はたしてありがたいことであるのかどうか」

と呟きながら、溝口は担当の者を呼び寄せた。

自分ながら、どうやってこの方向に舵を切ることになつたのか、上手く言えない。

ただ、あの頑丈だった新井が、こういうふうに変ぶこと

があり得るのだということが現実のものとなつた今、昭夫自身の身内に燻っていた方向の見えない矢頭の行方が、にわかには明瞭な色を帯びてきたのだつた。

胃部に潰瘍痕があり、かなりのポリープが見られる。要精検。その他にも、高血圧、高脂血、コレステロール、血糖、蛋白、白血球などの異常値が示されている健診結果を見ながら、鳩尾のあたりがいつも重苦しく、起き抜けには腹部のあたりが膨満し、軽い立ちくらみさえあるという症状と、一年近く向かい合つて来た。

以前寛平の店に出る前、早朝に溝口の入院する総合病院の建物を見た後、勇をふるつて精密検査を受診したのだつた。その結果、医師の顔色がみるみる変わるのを見てとれた。説明は、「直ちに入院の必要あり」と言うことだけだつた。

「今日はずい分ゆつくりだね。構わないのかい。待つてるんじゃないかい、若い子が」

お吉さんが健康そのものに光る頬を崩しながら、三度目の台詞を吐いた。

「結局、京子さんの方の目はないうということになるのかい」

「今更、何で京子になる。俺も俺だが、あいつだつて一度はどことんいい目をした筈だ。俺の出る幕などないし、何

のためにまた、京子が俺なんかと」

言いかけたところで、ひよつとして京子は保険のことが目的なのではないだろうか。だとしたら、とふと兆しかけた自分の内の妙な思いを、あわてて振り払った。

「二人してここに来てた頃は、これ以上ない組み合わせだと思っていたけどね。こんな具合に変わりゆくんだ」

「不憫ではあるよ。しかし、今は目の前のことが先だ」

「まだ気持は冷めてはいないんかね」

「新井も、俺も、こうなることになっていったんだろう」

昭夫は二杯目を空にすると、歯止めがきかなくなつた。

五杯目のとき、「これ以上は毒だよ」とお吉さんが言ったが、「いいんだよ俺は」と激しく切り返した。

今日からでも入院すべきだと言つた医師には、「もう少ししないと、体が空かないんですよ」とその場で断つた。

医師は、「自分のことをなにより大事に、よく考えてください」と言いかけたが、昭夫はその言葉が終わらないうちに診察室を出たのだつた。

踏切近くまで来ると、夾竹桃の葉の陰を覗き込んだ。また、ひよつとして由加が潜んでいやしないかと目を凝らして見た。誰のいる気配もないことを確かめると、フツと胸を撫で下ろした。

踏切を渡つた。その足で真つ直ぐに歩けば、アパートだ。

路地を曲がり、電柱をやりすこし、アパートの見えるところまで来た。北端の部屋には灯りが点いている。そのあたりで、目が回り始め、気が遠くなつてきた。

由加にどのように話を向けようか、と何度も考えてきた。今日の今日のことなのでまだ手元にはないが、いきなり保険証書を手渡すべきか。そうすると、「見も知らぬ私に、何故」と聞いてくるだろう。「馬鹿にするんじゃないよ」と、唾でも吐かれかねない。

でも、このままでは結局、早晚男たちの手に引き戻され、闇から闇へと引き摺り回された挙げ句、捨てられるのがオチではないか。それとも、横領の罪で捕捉され何年かを塙の中で暮らすことになるかもしれない。いや、それより、自らの命を絶つことが先になるのかもしれない。

後数日待てば、溝口からの保険証書が届けられる。受取人は由加の名前になっている筈だ。契約内容の変更について、溝口と担当者との間でかなりの時間やりとりをしているが、何とかしようと言ふことだった。

由加がどういう出方をしようか、自分が今なすべきことはこれだ、と昭夫には思えるのである。受取人が京子であろうと由加であろうとどうでもよいが、この自分を、誰かが用立ててくれないものか、というだけでしかない。

酔いの勢いと言うか、酔い故の妄想の勢いと言つた方がよいのかもしれないが、上体を揺らしながらアパートまで

辿り着き、部屋の灯りを見上げた。

ドアを細めに開けた。

いつも炬燵の周辺には、布団や、昭夫の作業着や、赤いスカートなどが寄せられているのに、すっきりした空間が出来ている。

由加の名を呼んだ。六畳と台所とトイレの他には場所は無いのであるから、声をあげて呼ぶ必要などないのだが、狼狽していた。トイレを開け締めし、台所に戻り、炬燵の下まで覗いて見た。

由加の姿がない。

灯りを点けたまま、近くまで用を足しに行つたのかもしれないと、待った。流しの端に置いた時計が、十二時を回ろうとしていた。

十二時を回り、一時になつても戻つて来なかった。

昭夫の酔いは覚めかかつていた。

この時になつて、初めて由加が部屋を出て行つたのだと気付いた。書き置きらしいものもなく、いつもだとこしらえて待つている夕食の準備をした形跡もない。

今朝も出掛けに、戸締まりはちゃんとするように。それから、しばらくの間は、どんなことがあると変な気を起こさないかと約束してほしい、ということをお願い置いたつもりであった。

突然、口癖同様に主張していた自死を選んだのではないか、という思いが昭夫の胸に突き上げてきた。やはり、あの線路なのだ、と考えた。

なんとと言っても、あの線路傍には、お吉さんが言うとおりに、今でも成仏できない幾人もの魂が彷徨つているという話は出鱈目ではない、との思いを十分に抱かせてくれる何かがあるのだと思えてならない。

一刻を争うのは由加である。

ドアが締まったかどうか確かめず、アパートを飛び出し、人通りの絶えた夜の道を、駆けた。酔いの覚め際の際のふらつきが残る体を泳がせ、暗い水中をものがき泳ぎ、喘ぎながら走った。急に体を躍らせたためか、胃の腑のあたりで潰瘍が鳴動を始めたのだらう痙攣が走り、腐臭を放つ大量のものが込み上げ、たまらず道端に蹲つて吐いた。最初は突き上げてきたものをドツと吐き出しただけであつたが、腹腔の鳴動はいよいよ激しさを加え、最後には胃液を、唾液を、空気を、胃部そのものを口から突き出すかのごとくに、涙を流しながら吐いた。

道端に汚物を撒き散らしながら、体はよろめき走り、踏切の見えるあたりに辿り着いた。

夜の線路は、白く凍っていた。闇の底に、二筋の日本刀が延々と東から西へ、西から東へと刃を逆立てているかに

見える。

線路の上には、薄い靄が立ち込め、靈気かなにかのごとくに立ち込め、首筋を撫でていく音があった。ヒューヒュー、サワサワ、シユルルと鳴っていた。

線路の向こうに夾竹桃の繁みがあり、陰となつて揺れ動いていた。じつと目を凝らした。話に聞く靈気というものに似た冷たい気配が立ち上る中、夾竹桃の陰は折りからの風に一際強くザワめき、大きく傾いた。

陰の奥に、赤いものが見えた。由加だと思った。

確かに由加の顔を見た、と思つた。線路の刃に足を掬われ、転びまろびつしながら、陰の奥の赤いものに向かつて突進した。はっきりとした手応えがあった。由加の白い顔を間近に見、立ち竦んだそれを抱き取るうとした。冷たい手だった。冷たい頬だった。懸命に引き戻そうとした。

そのとき、陰の向こうからバラバラと走り寄つて来たものがある。

「止める、止めんか」

「こら、罰が当たるぞ。乱暴するんじゃない」

強い力で首を押さえられ、手を逆向きに捻り上げられた。いつの間にか、警察官に囲まれ、パトカーが二台も止まっていた。騒ぎを聞いて、近所の窓や戸が開き、野次馬が集まつて来た。お吉さんも、寛平も寝ぼけ眼で立っている。「何したのさ、あんた」

お吉さんが、首に羽織つたショールを寒そうに引つ張りながら言う。寛平もしきりに目をこする。

「何ね、こいつがお地藏さんにかじりついて、懸命に引き倒そうとしてるんだ。あんたたち、知り合いなのか」

年配の巡査が、お吉さんに聞く。

「一〇番が、今夜五度も六度もな。とにかく貴様、何してやがるんだ」

「由加が、由加が」

「この繰り返しばかりだ。それが何なんだ」

巡査の言葉の後に、「へえ、そんなことですか。あの、申し訳ないですが、この人うちの店で飲み過ぎたんです。何とか、あたしに免じてここは預かせてもらえませんか」お吉さんが太い声を出した。

巡査たちは互いに顔を見合せていたが、「今度だけだぞ。幸いまだ危害や損害などは発生していないようだからな。こんなこと何遍もやらかしてたら、容赦なく臭い所にぶち込むぞ」と言い、お吉さんに昭夫を引き渡した。

「何だよ、真夜中にとんだ人騒がせな」

「それにしても、いい歳して、何やってんだか」

野次馬がぞろぞろ消えていった。

「由加、由加って、どこの子だい」

「先ほどから、アパートにいないんだ。いや、放っておく

と、危ない。線路に飛び込んでしまうかもしれない」

「例の子かい」

「若くて綺麗な子なんだ。事情があつて、外には出られないけど。もう一か月近く前になる。あの夾竹桃の陰から線路に飛び込もうとしていた」

お吉さんは、頷いた。

「今でもこの線路には、ときどき自殺志願者が現れるんだよ。由加つても、その一人なのかも知れないねえ」

「俺も飛び込む寸前に命を救つてやつた手前、今になって、いなくなつてしまつたでは引つ込みがつかないんだ」

「一人の命がかかつているんだから迂闊なことは言えないけどさ。しかしときどき、こんなことがよくあるんだ。特に、あんたみたいな男が相手だとね」

お吉さんは、朝日に眩しそうに目を細め、「自分の身近な生死のことに直面すると、聞いた者も一緒に死の淵を覗き込んでしまうつてこと、あるらしいよ。新井さんのこと、降つて湧いたような話じゃないか。あたしらだつてびびくりしたし、あんたといつたら、もう顔色まで土気色に変えてたし」と一人で頷く。

寛平も同じだった。

「新井さんの話が出た途端、仕事に出て来る時間は早くなるし、それはそれで助かるけど、かなり血相変えてたな。何かに取り憑かれたのかもしれないと思つたよ」

「由加のことは、俺の妄想だという訳」

そう言われてみると、由加の顔立ちの細部が奇妙に思い出せないのが気になりだした。

「四十年前の事故で、まだ自分の本当の居所がわからない死者がたくさんいるんじゃないかということで、道端に朽ちていたお地藏さんが、同じ場所だけど、きちんと祭られることになつたみたいだよ」

お吉さんの顔には、寝足りなさから来るのだろう、青黒いむくみが目の下を隈取っている。

昭夫はお吉さんたちと別れ、アパートの部屋に戻つて来た。部屋には、由加に預けていた筈の鍵束が台所の上の釘に掛けられていた。そこは昭夫自身が場所を決めていたところだった。

由加が着ていた京子のオレンジのスカートとネグリジェは、畳んで炬燵傍に置いてあり、布団も茶碗類もきちんと整理されている。

由加の唇に塗られた京子の口紅も、炬燵板の隅に行儀よく置かれている。しかし、京子のセーターが見当たらない。昭夫はそのまま炬燵に崩れた。

由加、と言葉にすれば、あのバネよりもしなやかな肢体が生々しく蘇つてくる。下腹部の濃密な味も、指の腹にしつかり粘り着いている。

しかし、由加の顔は、多すぎる黒髪の奥に隠れ、いつも小さくまとまっていた。その表情がぼんやりとしか思い出せない。あの激しい怒りを露わにしていた、目鼻の明瞭な形が思い出せない。

胃部に潰瘍痕があり、かなりのポリープが見られる。要精検。その他にも、高血圧、高脂血、コレステロール、血糖、蛋白、白血球などがどうのと異常値が示されている健診結果を見ながら、鳩尾のあたりがいつも重苦しく、起き抜けには腹部のあたりが膨満し、軽い立ちくらみさえあるという症状。

「あらあ、帰っていたのね」

ノックもなくドアが細めに開けられ、由加の声がした。

急いで飛び起きようとしたのだが、顔を覗かせたのは、めったに訪れることのない大家の奥さんで、今書留速達が届いたのを預かったからと、持参してくれたのだった。差出人は溝口で、依頼したばかりの保険証書だった。

昭夫は、いかにも溝口らしい迅速な仕事への対応ぶりが、今回ばかりは、出口のないエア―ポケットに滑り落ちる道筋へと丁寧にも導いてくれているかのごとく、「くだんの商品、お申し越しのとおり」とある太字の万年筆の文字を、ぼんやりと追った。

(了)